

# 「日本画でモネ捉え直す」

長く名古屋を拠点に活動してきた日本画家・平松礼二さん(モネ)は神奈川県鎌倉市での個展が、仏パリ郊外のジヴェルニー印象派美術館で、三十日から開かれる。巨匠クロード・モネが晩年を過ごしたゆかりの地に立つ美術館での、自身二度目の個展。モネに共鳴し、そのオマージュ作品を多数手がけてきた画業が、現地であらためて評価される機会になりそうだ。(中村陽子)

## 平松礼二さん、仏ジヴェルニーで個展

仏ジヴェルニーでの個展について話す平松礼二さん＝神奈川県湯河原町で



「フランスでのジャポニスム(日本趣味)復権の布石がまた打てる。楽しみです」フランスでの個展の前に、平松さんが神奈川県湯河原町の町立美術館で語る。同館の二階には自作を常設展示する「平松礼二館」が設けられ、

昨年秋には専用のアトリエもできた。色鮮やかな岩絵の具や大小さまざまな絵筆が並び、空間で、隔週の土・日曜には「湯河原十景」(仮称)を制作する様子を公開する。

今回の個展は十一月初旬まで開かれ、テーマは「ジヴェルニーで平松礼二」。印象派美術館が所蔵している平松作品から、初展示の屏風絵「モネの池に夕の雲映る」など、計九点が並び、いずれも池に浮かぶ睡蓮や水面の輝きがモチーフで、モネの影響がはっきりと分かる作品だ。

「モネは百年以上前に、浮世絵などの日本美術から影響を受けて油絵を描いた。今度私は私が、現代の日本画家の

## 同じ光景見つめ自分流に

目で、モネを捉え直そうとしているんです」。モネが絵を描いた場所に繰り返し足を運んで、先達の視点を意識しながら同じ光景、同じ自然現象を見つめる。その上で、墨や岩絵の具、金箔など日本画の画材と技法を用いて、自分自身の作品に仕上げている。

「絵に込めた芸術的な意図や、言葉ではうまく表現できないようなひっかかりが、画家同士だから分かる。私の遊び心も加えて、モネと心のうちの探り合いをしています」

こうした創作のきっかけは二十五年ほど前、パリのオランジュリー美術館で、有名な「睡蓮」シリーズと向き合ったこと。楕円形の空間の壁一面に飾られた幅八十センチを超す大作について「絵巻物にしか見えなかった。これを区切れば屏風絵です。思いがけないところに、日本があった。何でモネがこれを知っていたのかと、本当にびっくりしました」。絵の前から動けないほど衝撃を受けた体験を、昨日のこのように語る。

一九四一年東京生まれ。四十六年に名古屋へ転居し、愛知県立旭丘高の美術科で日本画を学んだ。在学中に「青龍社展」で初入選と奨励賞の受賞を果たすと、早くから頭角を現したが、五十歳になるまでその目は東洋を向いていた。

「モネの池に夕の雲映る」(六曲一隻屏風)＝2013年、ジヴェルニー印象派美術館蔵



「日本のルーツを探るべく、主にアジアの国々を旅して、モチーフにしてみました」だが「睡蓮の体験」で、関心は一気に印象派に傾く。印象派の画家の創作を検証し、彼らが日本画に感じた魅力や「装飾性と様式美」にあると考えるようになった。「ジャポニスムを採り入れた絵が、

フランスでも旧来の美術のあり方を打ち破る力になったわけです。私の知る学校教育では、日本画は洋画と比肩するものとは教えられてこなかった。でも本当は、もっと大きな可能性がある。世界で独自性が発揮できるのは、日本画の発想だと思いますよ」

印象派美術館での前回の個展は二〇一三年。同館で日本人美術家が個展を開いたのはこれが初めてで、同館の最高記録となる約七万五千人の入場者を集めた。翌年には独ベルリンの国立アジア美術館に巡回。今では米国をはじめ、複数の国から作品の引き合いがある。いわば「第二のジャポニスム」を実現しつつあるタイミングでの今回の個展。「かつて日本の芸術に印象派の画家が熱い関心を寄せたように、いつか自分の絵がフランスで何かを与えられたら、うれしいですね」